

意思決定力の育成をめざした社会科学学習

— 「仮の意思決定の吟味」を位置づけた試み—

上之園 強

1 研究の意図

小学校の社会科学授業では、社会的問題場面を設定し、合理的意思決定力の育成をねらう授業がおこなわれるようになってきた。このような授業の一つに「最初に社会的問題場面に出会い、そこから解決策を考えるために自ら探究し、意思決定する」展開¹⁾があるが、この授業には、次のような問題点があると考えている。

- ◇ 取り扱う社会的問題が、深い社会認識を必要とする場合があり、児童にとっては、問題場面そのものの理解が難しいことがある。
- ◇ 学習過程が大人の合理的意思決定の論理にそって構成されている場合があり、児童にとっては難しく、主体的な学習になりにくいことがある。
- ◇ 意思決定力のとらえ方が曖昧なまま学習目標が設定される場合があり、そのために学習が難しくなったり、事実認識が不十分なままで決定だけを求める学習に陥ることがある。

そこで本研究では、上記の問題点を改善し、小学校児童が意思決定できる学習をめざしたい。特に導入部に焦点をあてて児童が主体的に深めていく学習過程を検討していく。

2 意思決定力を育成する基本的な考え方

ここでは、育成する意思決定力の焦点化と学習過程にしぼって基本的考え方を述べていく。

(1) 育成する意思決定力の焦点化

社会科学における意思決定力を次のようにとらえている。

「意思決定力とは、問題場面での自己の行為を科学的な事実認識と反省的に吟味された価値判断に基づいて決定するために必要な能力であり、目的を達成するために、あるいは問題を解決するために考えられるすべての解決策の中から、より望ましいと判断できるものを決定することのできる能力である。」²⁾

この能力は、民主的な価値観を土台とした事実認識力や価値判断力といえる。³⁾

このように社会科学において、確かな意思決定を行っていくためには、問題状況の事実関係を正確に把握していることが大前提となる。また、小学校の児童が、事実認識の不十分なまま価値判断し、意思決定をおこなうと、不十分な決定となり、その状態でより確かな決定を求めても児童にとっては無理があると考えている。そこで、本研究では育成する意思決定力を意思決定のために必要な事実認識に焦点をおき、段階をおって育成していきたい。

意思決定を行うために必要な事実認識力の育成に焦点をあてた実践を行う

(2) 主体的で深い意思決定に向かう学習過程

意思決定の基本的な過程⁴⁾を以下のようにとらえ、本研究では、児童が主体的に意思決定していくように、また、そのための事実認識力に焦点をあてた育成がなされるように学習過程を組織する。

- ①問題把握 ②問題分析 ③達成すべき目的の明確化 ④実行可能な解決策の提出
- ⑤解決策の論理的結果の予測 ⑥解決策の決定と根拠づけ ⑦決定に基づく行動

学習導入部①の問題把握の後に「どうしたらよいか」という問いを設定し、子ども個々が「仮の

意思決定」を行なう。そして、「仮の意思決定を児童が相互に吟味する場」を設定する。

そして、子どもたちが事実関係や背景にある考え方を調べた後に、再度「どうしたらよいか」と問いかけ、意思決定をおこなう展開を試みる。

このような展開をとるのは、問題把握の後に、解決策を見いだすためには何を調べたらよいかと小学生が考えていくのは、難しく、主体的になりにくいととらえているからである。

学習の主体性と確かな事実認識に基づいた意思決定をめざして、学習の導入部に「どうしたらよいかという仮の意志決定とその吟味」を位置づけた学習過程を設定する。

小学生が主体的に意思決定に取り組んでいくためには、素朴であっても自分なりの考え（仮の意志決定）を持ち、その考えを出しあい吟味するなかで、不確かさに気づいたり、新たな考え方に気づく場が必要であると考えている。この吟味の過程を通して、児童は、より確かな決定を求めようと意欲的になったり、意思決定に必要な「事実関係を認識する視点」を見いだしていくのではないかと考えている。以上の考え方に基づく学習過程を図示すると以下ようになる。

過程	めあて設定	個人での自力追究	集団を通した追究	達成・発展	
意思決定過程	問題把握 → 問題分析 → 解決策の提出 → 解決策の予測 → 解決策の決定			意思決定	
子どもの活動	自分の現時点での考えを仮の決定として持ち吟味する	問題の背景や様々な立場や考え方を調べる	調べたことをもとに自分なりの案を考える	自分なりの案を選んだとしたら、どうなるか考える。	自分や他者の考えを参考にしながら、決定を修正・深化する

<注> 1) この考え方には、小原友行「社会科における意思決定」社会認識学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書、1994、がある。

概念探究の後で意思決定する考え方には概念探究・価値分析型社会科、岩田一彦『社会科の授業分析』東京書籍、1991、p58、がある。

2) 小原友行「社会科における意思決定」社会認識教育学会編『社会科教育学ハンドブック』明治図書、1994、pp168-170。

3) 社会科教育指導用語辞典（論争問題に対する合理的意思決定能力）教育出版、1986。

4) 小原友行、上掲書、pp172-173、1994。

3 意思決定力を育成する授業の実際 第5学年単元「宮島のシカと」の場合

(1) 単元目標

- 1 自然環境（シカや山林）と人間との共生について、自分なりの解決策を考えることができるようにする。
- 2 観光地宮島町のシカ問題の背景を理解することができるようにする。
- 3 基礎的資料の効果的活用や観察調査をもとに、表現することができるようにする。

(2) 単元展開計画..... 8 時間

(3) 実践の概要

第一次	観光地宮島町のシカ問題について知り、解決策を考えていく見通しをもつ。..... (3)
	①観光地宮島町でシカの被害が起きて問題になっていることを知る。 ・ 出没地域、増加の推移 ・ 被害の様子や件数
	②シカ被害をなくす「仮の解決策を吟味」し、解決策を深めていく視点をもつ。 ・ 解決策深めるうえでの不明な点 ・ 解決策を考えていく手順
第二次	解決策を深めるために、シカ問題の背景や被害対策の考え方を調べる。..... (3)
	①自分なりに探究する。
	②個人で探究したことを学級集団で検討する。

- ・宮島の自然の様子
- ・シカの生態（食性の変化など）
- ・観光客の接し方
- ・被害にあった人々の考え
- ・宮島町の対策案

第三次 解決策を深め、自分なりの解決策を決定する。…………… (2)

- ①自分なりの解決策を複数考え、一つにしぼる。
 - ・複数の解決策を選択した場合の予測、長所、短所の検討
- ②解決策を学級集団に出し合い考え方を深め、最終的に決定する。
 - ・共生の視点からの自分の決定

① 観光地宮島でのシカ被害問題を把握する。

ここでは、観光地、宮島の市街地で、シカ被害が増えて、その対応を迫られていることを把握することがねらいである。把握にあたってのポイントは、宮島が観光地であること、シカが増えたというよりシカ被害が観光ルートでふえてきていること、シカが完全にいなくなると観光地としてはこまること、そのためどうしたらよいかシカ対策協議会を開くほどに困っていることなどである。そこで、次のように進めてみた。

シカや鳥居の描かれたポスターをもとに、宮島のイメージを話し合う。年間の観光客数や観光の様子をビデオで提示する。このことをもとに、宮島が日本や世界から多くの人々が訪れる観光地であること、世界遺産の厳島神社やシカなどが観光資源であることをおさえていった。



そして、児童が観光地宮島を再確認した段階で「苦情続出」という新聞を提示し、「観光地宮島ではいったいどんなことが起きているのだろう。」と問いかけ、新聞の読みとりをうながしていった。読み取りにあたっては、解説した資料も配布し理解を深めた。また、シカ被害の内容については絵カードで具体的におさえ、範囲については、地図で確認した。

② シカ被害をなくすための「仮の解決策」を各自がもつ

児童が、シカ被害の概要をつかんだところで、様子を実感的に理解していくために、被害に合った人の話や具体的な場面をVTRで提示した。また、シカ被害にあった経験やその時の気持ちを話し合い、シカ被害が自分たちと関わる身近な問題であることを意識させていった。

児童がシカ被害を具体的に自分たちの経験と結びつけてとらえ、何とかしたほうがいいのかという素朴な気持ちが生まれ始めた段階で、次の発問をし、現時点での解決策（仮の意思決定）を引き出してみた。

このようなシカ被害（板書の被害絵カードを示し）をなくすために、宮島町では、どんなことをしたらよいと思いますか。今の自分ならどうするか考えを書いてみよう。

ここでは、不十分ながらも、自分の解決策をもつことが大切である。そこで、子どもたちの解決策を引き出すために次の点に留意した。

- ・考える時間を十分に確保する。
- ・書く場を設定し、考えを整理する。

③ 仮の解決策を互いに吟味し、意思決定のために「何を調べるか」という見通しをもつ。

ア) 仮の解決策を互いに吟味する。

子どもたちが自分なりに現時点での解決策（仮の意思決定）をつくったところで、互いに吟味しあうことにした。ここでは、吟味を通して、意思決定していくことへの意欲化と意思決定していくために何が必要かを明らかにしていくことをねらっている。そこで、次の手順で行った。

- 1) 自分なりの解決策を学級に出し合う。よく分からない点は質問しあう。
- 2) 出された解決策の中で、よいと思うものを一つ、よくないと思うものをいくつか決める。

3) それぞれの解決策ごとに、よいと思うのはどうしてか、よくないと思うのはどうしてか、そのわけをだしあい吟味する。

4) よい、よくないのわけを出し合う中で、解決策の根拠の不十分な点を明らかにし、確かな意思決定をしていくためには、何を調べておかないといけないか考える。

ここで、互いに吟味する前に、いくつかの解決策の中から一つに絞る場面を設定したのは、このことをきっかけとして、子どもたちがそれぞれの解決策の吟味をおこなっていくのではないかと考えたからである。子どもたちの解決案は、以下の7つの視点から様々なものが出された。

えさの与え方	◎(2)▲えさをあげない。 ▲えさ用に、御飯の残りを外に置く。	◎(2)▲えさ係がシカにえさをあげる。
店の防御	◎(5)▲店のまわりに嫌いなものやにせものをおく。	
シカの区分け	◎(1)▲店のものをガラスでおおう・店にシカがきたら音がでるようにする。 ・町に人は通れて、シカの通れない柵をつくる。 ・シカの集まる場所におりをつくる。・シカ用トイレをつくる。	
帰郷	◎(1)▲シカのこない弁当（食べる）広場をつくる。	
譲渡	◎(16)▲山にえさを置いて山に返す	◎(7)▲山に木を植えて返す
衛生	◎(1)▲シカをえさでおびき寄せ、市街地に出す。	◎(2)▲動物園にあげる。 ・糞や尿のおいがでない工夫をする。
観光客や住民のマナー	・シカをさわらない、怒らせない。 ・宮島には大人と子どもが一緒に行動する。	・白い袋をシカのもたない。

*◎は一番よい、▲はよくないと児童が挙手で意思表示したもの。()内は人数

このような解決策が出されたところで、このなかで、現時点で一番よいと思うものとよくないものを選び、その理由を出し合って、どの解決策がよいか吟味することにした。

吟味の一例を示すと次のようになる。

(賛成)	山があれいているから、シカが帰れないのだから、木を植えて帰れるようにする。
(反対)	宮島の山は本当にシカが帰れないくらいあれいているのか。 植えるといってもシカの好きな木がわかるのか。
(賛成)	それはよくわからない。山があれいているから出て来るんだと思う。 どんな木なのかは、よくわからない。
(反対)	よくわからないのであれば、山に帰してもうまくいかないのじゃないか。

(イ) 意思決定のために何を調べ、どのような手順で考えるか見通しを持つ。

上記のように、児童は現時点での解決策（仮の意思決定）を互いに吟味しあうなかで、自分の考え方の根拠が不十分であることに気づいてきた。また、新たな考え方にふれて、解決策を考えていくためには、いろいろな角度から考えて行かなくてはいけないことにも気づき始めてきた。

そこで「意思決定をするためには、何を調べておかないといけないか」を問いかけてみた。子どもたちの考えを整理すると以下の5項目になる。ここで解決策の現状については、児童が、十分目を向けていなかったため、教師が現場にいる人の気持ちや解決策も聞いてみようと思言をおこなった。そして、これらを調べ、改めて意思決定することを確認した。

シカ被害の現状	(シカのどんな被害が、いつ頃、どんなところで増えたか)
シカの生態	(シカはもともとどんな「食べ物、住むところ、もの」が好きなか)
宮島の自然環境	(宮島の自然や山はどうなっているのか。シカにあっているか)
シカと人の関わり方	(シカと観光客や町の人との関わり方のいいところ、よくないところは何か)
解決策の現状	(宮島町や観光客はシカをどう思い、どうしたいと思っているか)

④ 意思決定に必要な事実を自分で調べる。

自分は、上記のどの視点から調べていくか。また、調べた後、どのような手順で意思決定をしていくかを確認し、個人で調べる学習を設定した。調べる資料は、児童だけでは収集しにくい面があるので、新聞、宮島町広報誌をもとに作成した基本的資料（被害状況、対策の住民アンケート、シカと観光、シカの食生活、保護と観光、シカ対策）を配布した。そして、個人で調べた段階で基本的な内容については、グループや学級で発表しあい共通確認をおこなった。

⑤ 調べたことをもとに自分なりの意思決定を行う。

自分なりの意思決定を次の手順で行った。

- 1) 調べたことをもとに、自分なりの解決策を考えられるだけ書き出す。
- 2) 宮島町では、共生の道を模索していることを再確認する。
- 3) 書き出した解決策について、その方法を選んだとしたらどうなるか一つ一つ考えて、その中で一番よいと考えた策を一つ決める。

ここで「選んだとしたらどうなるか」を考えて決定するようにしたのは、この推論の過程が意思決定にとっては重要なステップの一つであると考えているからである。現時点で十分でなくても、このような段階を踏んだ丁寧な意思決定の方法を学んでほしいと願っている。

児童は、それぞれに調べたことをもとに解決策を考え、一つに絞っていった。一例を示すと次のようになる。

⑥ 他の考え方も参考にして、さらに意思決定を深める。

一つに決定した解決策を出し合い、決定した理由を互いに述べあって、他の考え方を参考にする場を設けた。そして、その後再度自分の意志決定を見直すようにしてみた。

ここでは、調べたことやその解釈が独りよがりにならないように、また意思決定が狭い範囲で行われることのないようにしたものである。

児童から出された解決策（意思決定）を分類すると次のようになる。 ()は人数

えさの与え方	えさをあげない（間食をあげない、店で売らない、みせない）	(7)
人のマナー	自然のえさを売り、自然に帰れるようにする。	(1)
	シカをかかわらない。おこらせないように呼びかける。	(2)
店の防御	店のものをガラスでおおう	(1)
	店で自然の草や実を売り、自然に帰れるようにする	(1)
シカの区分け	柵を山から町につくり、その中で飼う。	(1)
帰郷	えさをやめて、山を整備（植林、管理事務所など）して山に返す	(20)
避妊	雄と雌をわけて子どもを生まないようにする（2～3年に一度子ども）	(5)
駆除	どうしても駄目なときは、いい数になるようシカを駆除する。	(1)

⑦ 学習を終えてのふりかえり

学習後の児童のまとめやふりかえりの中に「調べていく前はシカによる被害だと思っていたが、調べていくうちに、シカが悪いのでなく、人間がシカに被害をあたえているのではないかという気がしてきた。」という記述が見られた。このように、社会的問題を一面からみるのではなく、自分の見方からいったん離れ多角的に見ていくことが、共生の視点に立って考えていく上で、また、意思決定を深めていく上でも重要ではないかと考えている。

① シカの被害をなくするため、宮島町ではどんなことをしているのかを調べ、調べたことをもとに、自分で考えた解決策を考えられるだけ書いてみよう。

自分で考えた解決策	票数
弥山に植林して、弥山にかえす	◎
店の商品もち、ケースに入れる	△
えさをあげない	○
えさもじゅうげんにあげる	△

② 書き出した解決策について、その方法を選んだとしたらどうなるか考えて、一番よいと思う解決策を決めて◎をつけよう。そして、なぜその方法にしたのか、の理由を書こう。

③ 選んだとしたらどうなるか考えて、次のように○と△をつける。
○：よい方法だと思う。
△：少しよい方法があると思う。
次に○の中から一番よいと思う方法に◎をつける。

自分で考えた解決策の中で一番よいと思ったものを書こう。

弥山にかえせば町民、観光客の山にもめいめいくまげない。肥料を植林したので、本来の山にもうしなげない。肥料を植林したので、エサからあげれば、シカもでなくなくなる。つまり、山を綺麗にする。また、山にシカがいなくなると、山という観光客もいると思うので、町民の山がきれいになるから、エサは町民のいけいけをしようすべきだと思う。

自分の考えた解決策を出し合い、話し合ってみよう。（どんな方法があるか、どうしてその考えたのか、理由、実行可能）

④ 学習で話し合った解決策も参考に、自分の調べた結果をなくすために、どのような解決策がよいのかを決めよう。そして、その方法に決めたのはなぜかを書こう。

自分で考え決定した、シカの被害をなくす解決策

弥山に管理するところをつくり、植林もした上で、山にかえす。

その理由
よく考えたから、植林もするから、いい方法だのをつづけられた。

◎

○

△

